

キュウリ抑制栽培における褐斑病の 効果的な防除体系

みんなで進めよう
茨城農業改革

茨城県農業総合センター園芸研究所

キュウリ褐斑病は、品種の変遷や各種薬剤に対する耐性菌の発生等により、栽培早期から多発生し、収量低下や品質低下が問題となっています。抑制栽培において、本病の重要防除時期、薬剤の防除効果及び効果持続期間を考慮した防除体系は、防除効果が高く、収量の向上が図られます。

キュウリ抑制栽培における褐斑病の防除体系

褐斑病が初発生する8月中旬～下旬は、最重要防除時期です。この時期には、防除効果の高いマンゼブ水和剤等を散布します(表1)。

褐斑病が急性進展する8月下旬～10月中旬は、ジエトフェンカルブ・チオファネートメチル水和剤やフルジオキソニル水和剤20等の防除効果の高い薬剤を、効果持続期間に応じて7～10日間隔で散布します(表1)。また、10月下旬～11月上旬は、イミノクタジナルベシル酸塩水和剤やTPN水和剤等の薬剤を効果持続期間に応じて7～10日間隔で散布します。

表1 キュウリ抑制栽培における褐斑病の防除体系と散布例

防除体系 (定植期 7月下旬～8月上旬)			散布例	
(発生初期) 最重要防除時期	8月中旬～下旬	初期病斑を確認したら直ちにAグループの薬剤を散布する。	発生初期	8/10頃 マンゼブ水和剤 (ジマンダイセン水和剤)
発生初期と急性進展期の防除の間(8月中下旬頃)にBグループ薬剤を散布				8/20頃 イミノクタジナルベシル酸塩水和剤 (ヘルコート水和剤)
(急性進展期) 重要防除時期	8月下旬～10月中旬	Aグループの薬剤を効果持続期間に応じて7～10日間隔で散布する。(ただし、同系統薬剤の連続散布は行わない。)	急性進展期	8/27頃 ポリカーバメート水和剤 (ヒスタイセン水和剤)
		9/6頃 フルジオキソニル水和剤20 (セイアーフロアブル20)		
		10月下旬～11月上旬 AまたはBグループの薬剤を効果持続期間に応じて7～10日間隔で散布する。(ただし、同系統薬剤の連続散布は行わない。)		9/16頃 ジエトフェンカルブ・プロシドン水和剤 (スミフレンド水和剤)
収穫終了 11月中旬				9/23頃 マンゼブ水和剤 (ジマンダイセン水和剤)
AおよびBグループの薬剤名(カッコ内は効果持続期間)				10/3頃 フルジオキソニル水和剤20 (セイアーフロアブル20)
A: キュウリ褐斑病の防除効果が高い薬剤 マンゼブ水和剤(10日)、ポリカーバメート水和剤(10日)、フルジオキソニル水和剤20(10日)、ジエトフェンカルブ・チオファネートメチル水和剤(7日)、ジエトフェンカルブ・プロシドン水和剤(7日)				10/13頃 ジエトフェンカルブ・プロシドン水和剤 (スミフレンド水和剤)
B: キュウリ褐斑病の防除効果が認められる剤 TPN水和剤(7日)、イミノクタジナルベシル酸塩水和剤(7日)				10/20頃 イミノクタジナルベシル酸塩水和剤 (ヘルコート水和剤)
				10/27頃 ジエトフェンカルブ・チオファネートメチル水和剤 (ケッター水和剤)
				11/3頃 ポリカーバメート水和剤 (ヒスタイセン水和剤)

褐斑病の防除効果と果実収量

キュウリ抑制栽培において、本防除体系を実施した場合、現地慣行の防除法に比べて褐斑病の防除効果が高く、栽培終了時まで発病度を低く抑えることができ、収量の向上も図られます(園芸研究所内試験:図1、かすみがうら市現地試験:図2)。

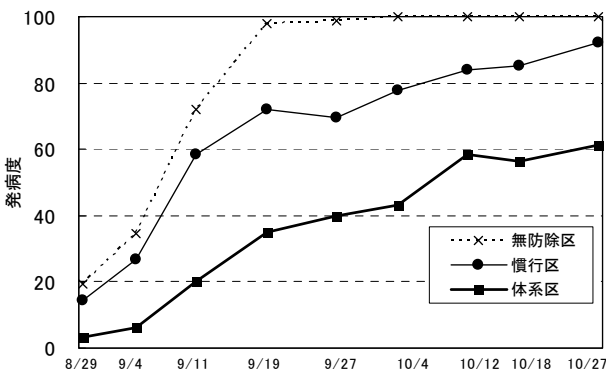


図1 キュウリ褐斑病の重要防除時期と有効薬剤を組み合わせた防除体系による発病の推移(所内試験, 2006年)

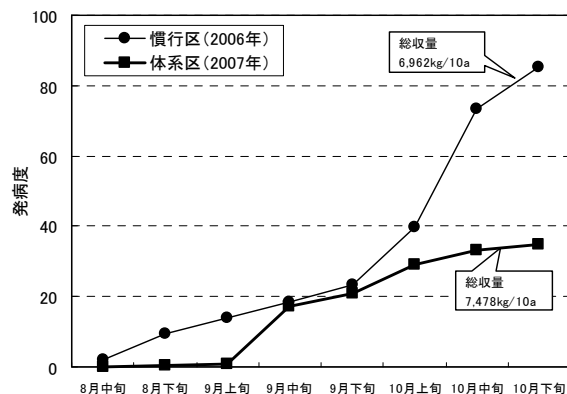


図2 キュウリ褐斑病の重要防除時期と有効薬剤を組み合わせた防除体系による発病の推移(かすみがうら市現地圃場)